

里山グループ

菊川 年明

◆ ならやまの薪割り

シニア自然大学校から実習生の方がよく訪れる。実習生の方は世話役に従って園地や里山の見学と、いずれかの作業班に加わって実務の教習を受ける。あるとき、女性の実習生の方が、世話役から「実習に薪割りをしてみてはいかがですか」と問われ、びっくりしていたことがあった。「薪割り」と聞けば、たいていの方は斧を振りかざして丸太に挑む重労働をイメージするから、それを「やらないか」と言われれば、驚くのは当然である。

しかし、本会には薪割り機という便利な機械があり、それを使って行う薪を割る作業だから、

困難な作業

でないことを説明する

と安心して、

「やってみよう」ということになる。そして、

取りかかっ

てみると、面白いようにコナラの丸太が割れるので、

おおかたの方は非日常的なことだから喜々として作業にいそまれている。

私が子供の頃は戦前であったから、かまどでご飯を炊くのも、風呂を沸かすのも、燃料はすべて薪であった。それに当時の主婦は炊事、洗濯、掃除など、すべてが手作業であったから忙しく、薪割りなどは子供の仕事にされていた。街中に住んでいたもので、薪は購入したもので、粗く割られたものが束になっていたが、そのままでは使いにくいので、更に細分する必要がある。薪を細分する道具は手斧であるが、手斧は手入れが行き届いていなかったので刃先は丸くなっており、「鈍器」であった。家事手伝いの中で一番嫌な仕事が薪割りであったことをよく思い出す。それに当時はコナラのような良質の薪は少なく、割りにくい節だらけの松材が多かったことも作業を困難にしていた。



エコファームグループ

松本 武彦

◆ 里山に春

里山に春が巡ってきた。日の光を浴びて佇んでいると、昔、春の語源について聞いたことがあることをふと思い出した。なぜこの季節を「はる」と呼ぶのかということである。

これには、もとになった幾つかの言葉が考えられるという。それらは「張る」「^は墾る」「晴る」である。「張る」は草木の芽がいっぱい膨らむ様子をいい、「墾る」は田を耕すという意味、そして「晴る」はよく晴れ渡った様をいう。いずれもこの時期特有の光景を表しており、これらが「はる」の語源だという。この里山にはこれらすべての「はる」があり、思い思いの春を感じられてよい。そして何よりも、この恵まれた自然のもとでよき人たちと共に日がな一日活動できるのがうれしい。

ついでながら、「春」という字は、「草が日を受けて群がり生ずる様」を表すという。暇に任せてじっとこの字を見ているとそのようにも見えてきそう。

さて、農園では育苗のための夏野菜の種まきやじゃがいもの植え付けが行われている。

今年改修されて一回り大きくなった温室は、ナス、キュウリ、トマト、トウガラシ、カボチャなどのポットでにぎやかになった。



畑では「ごろごろ植え」という里山では初めての方法で、じゃがいもの「キタアカリ」が植えられた。これは、従来のように種いもを土中に埋めるのではなく、畝の上に種いもを並べその上を畝ごとマルチシートで覆うという方法である。こうすることで、いもの肌が黒くなる「そうか病」を防ぐことができるほか、雑草の繁茂をも防ぐことができる。美味をお届けできる日もそう遠くない。

芽ぐみや耕耘機の音に混じって人々の声が明るく弾む「はる」である。

景観グループ

福田 美伸

◆松林、竹藪の整備

昨年「内閣総理大臣表彰」受賞式後のレセプションで、鈴木会長が天皇陛下に拝謁され「私たちのボランティアでは松茸を採ろうと、がんばっております」と、話されたと聞いてびっくり。私たちは、献上松茸という、大きな力を得ました。

私は、川井顧問のユートピア構想に賛同し、3年前の年賀状には「今年の目標」として「竹林と松林の整備を行います」と書きました。鹿背山へ松林整備の仕方を知るため週1~2回、約1年行きました。一昨年の暮れ、景観グループ、そしてたくさんの皆さんと共に竹藪整備。「実りの森の竹藪は竹畑に激変」全員が川井顧問に褒めていただきました。昨年7月ベースキャンプへ、最後でした。川井顧問が、シニア自然大学校の先生とおいでになり、「彼が松林の整備を進めています」と紹介していただき「最高のプロジェクトである」と。

第1段階「地かき」、私たちは、昨年4月から全員参加の協働作業として行ってきました。1年を掛ける作業は大変でした。参加者は最初のころ50人以上で、すぐに完了するだろうと思いましたが、しかし、暑い夏には30人ほどに、作業時間も短くなり、9月20数人となり、なぜか30分ほどで半数が消え心配しました。でも、3月全員の力で予定通り「松林の地かき整備を完了」することができました。また、3月1日大和菌学研究所、藤本先生をお招きし、見ていただいた結果、「整備場所および、地かき」は完璧であるとお墨付きをいただきました。4月第2段階、私たちは「植菌」へと進みます。5~10年後には「必ず、天皇陛下へ献上」できます。そして、私たちは、子や孫たちへ「マホロバ松茸の採れる平城山」をプレゼントしてやろうではありませんか！



里山の今



パトロールグループ

有元 康人

◆パトロールREPO

厳しい冬も終わりに近づいて、今日のならやまは春の嵐、夕べからの強風で、ベースキャンプの東側のコナラの大木が道をふさいでおり、通行できない状態になっていました。

お水取りの前の散策路も、生暖かい風が肌に触れ例年より一足早く春を感じています。

観察路の倒木の状態が気になりましたが、コナラの枝は、すでに落下しており、今回は道をふさいでいたのも2か所、一時期より大幅に少なくなっています。

落葉している自然林の風景は、ナラ枯れの幹が乱立しているのと、松くい虫によるアカマツの被害木とで殺伐とした感じを受けています。会員の中には、山が不健康になっていると評言されていますが、私が感じているのと同じかどうか？

パトロール班の活動で散策路の階段の補修やロープ張りもほぼ終わり、倒木も少なくなって片付け作業が無くなってくると次に何を行うのか？不健康と感じる山を、生き生きとした山に変えるには、いかがしたら良いのか？自然の再生力に任せるのか、再生時間を短縮するのに会員で何かできるのか？

パトロール班では散策路の周りの植物の保護育成と、少しでも楽しく山を歩いてもらえるような見所のある散策路作りに知恵がいるのでは？

殺伐とした風景も、すぐに春の息吹で隠してくれます。クロモジやサンシュユ、ツツジなどの春の花と、すべての植物の若葉で光輝くならやまになってきます。

もう春はすぐそこです。



ならやま虫だより

菊川 年明



ならやま花だより

桜木 晴代

◆超小型のクワゴ

クワゴはカイコの祖先（原種）で、約5000年前の中国でクワゴからカイコが作られたといわれており、幼虫、成虫ともにカイコによく似ている。クワゴの幼虫は少し褐色で、少し小さいくらいが違いである。成虫（中型のガ）の違いは、カイコガは白っぽい、クワゴは褐色、それにカイコガは飛べないが、クワゴは飛べることである。

クワゴの繭はカイコの繭と同様に俵型ではあるが、殻は薄い。クワゴとカイコで特筆すべきことは、両種の間には繁殖力のある子孫が生まれることで、極めて近縁関係にあることがわかる。

クワゴは、よく見られる昆虫ではないが、ならやまではベースキャンプの前に昨年まであった大きなクワの木で毎年見られた。冬、クワの木の葉が散り果てた後に、枯葉の散り残りのようなものが見られたが、これは繭（抜け殻）の糸が枯葉とともに枝に絡みついている姿であった。昨年夏のある日、古川さんが「クワゴの繭だ」と言って、ガの繭を私にくださった。しかし、繭は長径が20mmくらいで、あまりにも小さいので「クワゴかな？」との疑念を抱きつつ飼育容器に入れておいた。繭の長径は普通40mmくらいある。8月中旬に羽化し、ガが現れたが、クワゴとは思えないとても小さなガであった。しかし、いろいろ調べた結果、ウルトラ級矮小型のクワゴ（オス）とわかった。

ベースキャンプ前のクワの木はなぜか近年弱り、病的な小さな葉しか付けなかったもので、この木にいたクワゴの幼虫は発育不良であったものと思われる。このクワの木も昨年10月末に倒れてしまった。古川さんにいただいたクワゴは、ならやま最後の貴重なクワゴになったのではなかろうか。

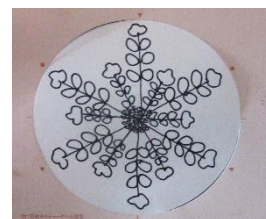


◆ロゼット

あの夏のフィールドの光景が思い出せないほど冬の野は一面が枯葉で覆われ、あの野の花たちはどこに？と。しかし野の花の多くは枯葉の下でロゼット状に葉を広げ春の来るのを待っています。

ロゼットとは

- *ロゼットの語源はバラ
- *茎を立ち上げず放射状にバラのような形に広がる葉のこと



- *踏みつけられたり刈り 採取されたりする環境で生きるため、または、冬の間の芽を厳しい寒さや風雪や乾燥から守った後太陽光を無駄なく受けるための戦略的な形。

ならやまのロゼット



タンポポ



チチコグサモドキ



オオバコ



オキノゲシ



シロツメクサ



ナズナ

オオイヌノフグリやホトケノザが早くも春の訪れを知らせてくれています。その傍らのロゼット状の葉を見つけ、どんな花を咲かせるのかを観察してみるのも楽しいかも知れません。